

## 個性という宝物

流山市立おおたかの森中学校 三年

朝日 あさひ 悠貴 はるか

「誰もが生きやすい社会」

多様な個性がある多くの人が、自分らしさを発揮して、違いを認め合い、違いを活かしながら協力することのすばらしさを改めて認識する場にした。

これは、昨年行われた東京オリンピック・パラリンピックで、この大会をきっかけに、私たちの社会や未来に向けて何ができるかを考え、大会後も実践していくものとして宣言されたものです。私も一人でも多くの人が、生まれ持った個性を堂々と発揮し、世界に一人しかない自分という存在を好きになってほしいと考えています。

私が、吃音という個性と出会ったのは、小学生の頃でした。頭の中では言いたいことが分かっているのに、その言葉がなかなか出てこないのです。幼い頃の私は、笑われてしまうのが嫌で、何かあっても言い返すことができないことに悩んでいました。吃音について説明しようと思ったこともあります。

でも、友達に急に気を遣われるのも嫌で自分の気持ちを伝えられずにいました。そんな時、友達から「普通に話せよ。」と声をかけられました。私の個性を知らない友達からの何気ない言葉でした。私にとっては吃音が普通で自然な話し方なのです。やはり自分にとっての普通は、相手にとっては普通ではないのだ。そう思ってから、友達に吃音のことをどうしても知ってもらいたいと考えるようになりました。そこで、当時、通っていた言葉の教室の先生や担任の先生と相談し、吃音のことや正直な自分の思いを学級でプレゼンテーションすることにしました。誰も聞いてくれないかもしれない。笑われるかもしれないという不安もありました。それでも、何もしなければ何も変えることはできないと、勇気をふりしぼりました。また、学級委員や放送委員にチャレンジし、積極的に人前で話すようにしました。プレゼンテーション後も、吃音が出て友達に笑われてしまうこともありましたが、「それは個性なんだから、しっかり聞いてあげて。」と言ってくれる友達がいきました。ちゃんと伝わったんだ。話してよかったから。」と思うようになりました。あれ以来、吃音が出て「これが自分になりました。そして、今、吃音は自分らしさの一つだと思っています。」

吃音症を抱える人は百人に一人、日本では約百二十万人。世界では約七千万人もいると言われています。残念ながら治療法はまだ確立されていないのだそうです。私は、周囲に理解を求めることで、吃音を自分の個性として受け入れることができませんでした。しかし、「吃音は多様性から取り残されている。」「社会から置き去りにされている。」という声が聞こえてきます。こんなにも多くの人が向き合っているのに、なぜ、社会の問題として表に出てこないのでしょうか。これについて吃音を取り上げたテレビ番組では、「気軽に話してというけれど、恥ずかしさや笑われるかもという不安があれば表には出しづらい。大切なことは、気を遣ってほしいけれど、特別扱いはされたくないのだという微妙な心の揺れがある。『普通』とは何かを一人一人が考えることだ。」と言っていました。病気や障害の特性を理解することだけが違いを認め合うことではありません。自分の「普通」とは違う「普通」を持った相手の、繊細な気持ちに寄り添うことがお互いの違いを認めあうことなのではないかと思いました。多様性という言葉が頻繁に使われるようになりましたが、私は、本当の意味で互いの違いを認め合える社会にはなっていないのではないかと感じています。人それぞれ考え方や物の見方は違います。それなのに、みんながどう考えるかを気にしたり、その場の

雰囲気にならされたりして、違いがあることが悪いことのように受け止められている気がします。数の多い考え方が「普通」ではなく、自分自身でその違いについて考えてみてください。そして、その違いを否定せず、相手に寄り添ってあげること。それがスタートだと思います。

私は、様々な病気や障害に向き合う人が、私のように自分らしさを発揮できるようになってほしいと考えています。そして、個性という宝物をもった自分をもっと好きになってほしいと思います。